

『事に当たっては、考え抜く』～『パワーを発揮する』～

2024 年 12 月 24 日に、2001 年の『東京・武蔵野市吉祥寺』での【杉村隆先生、吉田直哉氏との対談『吉田富三（1903-1973）の人間と学問』（司会 樋野興夫 編集顧問 学会出版センター）】が送られてきた(画像)。杉村隆(1926-2020)先生と吉田直哉(1931-2008)氏との対談は大変懐かしい貴重な思い出である。

福島県石川郡浅川町にある【吉田富三記念館】から『この度、吉田富三博士没後 50 年・生誕 120 年記念事業としまして記念誌の発刊を計画進めております。』との連絡があり、『記念誌への執筆』の依頼を受けた。【吉田富三博士は、『自分のオリジナルで流行をつくれ』で、1) 顕微鏡を考える道具に使った最初の思想家 2) 顕微鏡でみた癌細胞の映像に裏打ちされた『哲学』 3) 『がん細胞で起こることは人間社会でも起こる』＝『がん哲学』、『事に当たっては、考え抜いて日本の持つパワーを充分に発揮して大きな仕事をされた。』】と癌研究会癌研究所時代の恩師：菅野晴夫(1925-2016)先生から学んだものである。

筆者は、医師になり、癌研究会癌研究所の病理部に入った。当時の所長であった菅野晴夫先生は、南原繁(1889-1974)が東大総長時代の東大医学部の学生であり、菅野晴夫先生から、南原繁の風貌、人となりを直接うかがうことが出来た。さらに、菅野晴夫先生の恩師である日本国の誇る病理学者：吉田富三博士との出会いに繋がった。菅野晴夫先生の下で、2003年『吉田富三生誕100周年記念事業』を行う機会が与えられた。こうして南原繁、吉田富三博士との出会から必然的に『がん哲学』の提唱へと導かれた。さらに『陣営の外＝がん哲学外来』へと展開した。不思議な時の流れを痛感する。筆者が『がん哲学外来』で語るのは、これまで学んできた先達の言葉である。まさに『言葉の処方箋』である。

吉田富三博士は、『人体の中で起こっていることは、社会と連動している』といい『がん細胞に起こることは必ず人間社会にも起こる』と述べている。ここに、『がん哲学』の源流がある。【『医師は生涯書生』・『医師は社会の優越者ではない』・『医業には自己犠牲が伴う』】(吉田富三)は、まさに、現代にも生きる『医師の3ヶ条』であろう。これが『がん哲学外来』の心得でもある。

